

[掲載紙]ぐんま経済新聞「にちぎんNOW」

[掲載日]2012年3月22日

[テーマ]それぞれの復興支援

東日本大震災から1年です。今月は、被災地の今を伝える報道が多くありましたが、復興にはまだ時間がかかるようです。

先日、沼田商工会議所の講演会に招かれました。その折に、会議所が宮城県気仙沼市の支援に取り組んでいることを知りました。繰り返し支援物資を運んだほか、破壊された被災地にイルミネーションを持ち込んで灯すことでエールを送りました。女性部や青年部も思いをそろえ、気仙沼の物産品の販売を計画しているそうです。昨年11月の沼田柔びす講では、気仙沼の寿司職人さんが千人の方に寿司を振舞ってくれました。感謝の気持ちが込められています。

支援対象を気仙沼に絞り込むことで息の長い活動にするつもりだと伺いました。道程の長さを視野に入れているのです。地域同士の支え合いが、日本を確実に明るく、強くしていると感じました。

現在でも多くの企業、団体、個人の方が、仕事を通じて、あるいは仕事以外の形で被災地の復興に貢献されていることでしょう。

日本銀行も、復旧・復興に取り組んでいます。例えば、被災地の金融機関を支援する低融資を続けています。より身近なこととしては、現金の供給があります。

現金は、電気・ガス・水道と並ぶ大切なインフラです。だれしも、「いざ」というときには預金を下ろして手元に現金を置きたいと考えるでしょう。日銀は、金融機関による引き出しに応じる形で現金を供給します。無用な不安と混乱を避けるためには、どんな状況であっても円滑に供給しなくてははいけません。震災直後の一週間、日銀仙台支店からは通常の3倍の現金が引き出されました。被災地から離れた前橋支店であっても1.7倍に増えました。

混乱が落ち着くと被災地では、海水に浸ったお札を新しい現金に引き換えてほしいという依頼が増えました。濡れると重なったまま固まってしまうのです。日銀では、そうしたお札を一枚一枚はがして洗浄し、真偽を鑑定した上で引き換えています。被災者の明日を支える大切な資金となります。

こうした作業には手間と根気と技量が必要です。被災地の支店には、前橋支店からも専門の職員が交代で応援に出ました。

被災地の復興を願いながら、これからも、なすべき貢献をしていきたいと考えています。

〔日本銀行前橋支店長〕
竹澤 秀樹